

---

# ようするにバカなんです

ゼクティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よつするにバカなんです

### 【Nコード】

N2722W

### 【作者名】

ゼクティ

### 【あらすじ】

異世界迷い込み。

男女比1：800の異世界にきた主人公。

そこは女性が世界を動かし、男性は全員に男ランキングというものが付けられ闘っていた。

闘いに勝てばランキングが上がり、負ければ下がる。そしてランキングが上位になるほどモテるし、娶れる嫁の数も増える。

しかも、この世界は美人の価値観がまるで違う。

ならば、ランキング一位になって俺的美人ハーレムを作るしかない

でしょ！

大変頭の悪い話を一人称で展開しております。ご注意ください

## 第一話 よじするにやじいじいじい

「さて、ここはどこだ？」

周りを見回すと見覚えのない建物ばかりだ。なんかビルまであるし……

とりあえず自己紹介でもしよう。

俺の名前は田嶋晋平<sup>たじましんぺい</sup>。身長一七三センチ、体重六六キロで生まれた時からこれまですっと黒髪。皆からシンペーとかシンちゃんと呼ばれている二十四歳の某県の大学生だ。大学院生じゃなくてあくまで大学生だ。歳が若干高めなのは浪人&留年をダブルパンチで受けてるからだ。あえて今は詳しくは触れないでおこう。趣味や特技は省くとして、好きなAV女優は素人だ。タバコも酒もどっちもやる普通の成人男性である。

「って誰に説明してんだろ……」

まあいい。ともかくここはどこだ？

自慢にもならないが、俺が通う大学は近所で一番でけえ建物がスパーという田舎にある。間違っても半径五十キロ圏内には四階建て以上の建物などない。では、目の前になぜ目測およそ五十階建てくらいの建物があるのだろうか……いや、その前になぜ俺は上半身はタンクトップで下半身は丸出しなんだ？ これではまるで変質者だ。あたりを見回したが、下半身を隠せるようなものはない。仕方なくタンクトップを脱いで腕を通すところに脚を入れてみる。うむ、下から覗き込めば見えてしまうが、前方からは見えない。これでいい。

次に俺が取るべき行動は道を尋ねることだな。どうやってここに来たのかわからない以上帰りようがない。ならば人に聞くほうが早い。

見たところここはオフィス街と呼ばれる場所に違いない。なぜか周りには人つ子一人いないが、太陽は中天ほどなので今はまさに昼です。それならビルの中に人はいるだろう。

俺は目の前のビルに迷うことなく突撃した。

ビルの中は冷房が効いていて今の格好だと少し肌寒い。だが、ここで寒そうにしてはいけない。あくまで自然に、これが普通の格好ですけど何か？ 的な様子を見せてないと通報される。つーかなんか知らないけど女の人しかいねーんだけど。

「こんにちは」

受付嬢らしき人に爽やかに声をかける。

「い、こんにちは……」

戸惑ってやがる。まあ、気持ちはわからなくもないがな。とゆーかこの人、お世辞にも美人じゃないな。太りすぎで顔がパンパン過ぎる。受付嬢って普通美人がやるもんじゃないの？

「弊社に御用でしょうか？」

「迷子なんですけどここはどこですか？」

「ま、迷子ですか……」

「迷子なんです」

しばし見つめ合う俺と受付嬢。しかし、ときめきは起こらない。

「どちらからいらっしやったのですか？」

受付嬢の質問に正直に答える。すると、受付嬢は考えてる仕種をしながら小首を傾げる。

「すみません。もう一度お願いします」

言われた通りにもう一度答える。今度はアパートの住所まで言うてやった。

しかし、受付嬢はまたも首を捻るばかり。

いったいどうゆうことだ。俺の大学はそこそそ有名だから同じ県内なら俺の住所を聞いてわからないはずがない。

ま、まさか……俺は知らず知らずに越県してしまったのか。

……くっ、思い出せ。思い出すんだシンペー。昨日俺は何をしていた。

確か昨日は……ビール片手に野球中継を見て寝たはずだ。うん、間違いない。それがなんでここに？ 高層ビルなんて憧れの都市東京くらいにしかないんじゃないのか？ 酔っ払って無意識に旅にでも出たんだろうか。いやいやないない。そもそも俺は乗り物以外に酔いと言う状態になったことなんてない。そんな俺がビール一缶でどう酔っつって言うんだ。

「とゆーかここどこですか？」

「ここですか？ ここはイズモという化粧品会社の本社ビルです」

知りません。

いや、化粧品に興味ないからなのか？ でもこんだけのけえビールを持ってることとは年商うん億円だろう。

「住所を教えてくださいな」

「アラマキ地区トヨジマ三丁目です」

どこ？

少なくとも県にそんな場所はない。

「どうしたの？」

「何かあった？」

おや、今まで静観してたご婦人方が寄ってきたよ。つーか皆して女子相撲に出てそんな体形してるな！。

「迷子らしいです」

ちよいと恥ずかしいぜ。

「へえー、迷子」

「ねえ、君ってランキング何位？」

何のランキングだろう？ まあいいや、適当に言っとけ。

「不動の三位です」

三つて数字が好きなんで。

ってあら、皆さんの視線がすっげー冷めてる。なんたる……何かに目覚めそつ。

「今のランキング三位は大和田様でしょう！？ くだらない嘘ついてないで、あんたは何位？」

誰だよ大和田様って……

「じゃあ十位」

「十位は鏡様でしょっ!」

鏡? ミラーさんっすか。

「だったら何位なら納得するんですか?」

「納得とかじゃなくてあんたの順位を言えっつーの」

なんでこんな理不尽に怒られてるんだろう。でも悪くない。

「だったら一位です」

「なによそれ……キングに対しての侮辱行為だわっ!」

お、おお……すげえ。その場にいた全員が火薬に着火したみたい  
に怒鳴りつけてくる。よくわかんないし、好みの女性はいないけど、  
快感だ。

「何の騒ぎっ!?! 今は昼寝時間でしょう!」

その時、一際よく通る怒鳴り声が響く。

見てみると、金髪ロングの白スーツに身を包む外人さんが立っ  
ていた。胸も目測Dはあるし、脚もすらりと長い。断言しよう、この  
人超美人だ。

「しゃ、社長……」

しかも社長!?

よし、ここに就職しよう。

「社長さん。俺をここの社員にしてください。靴舐めますから」  
「……ねえ、こいつはいきなり何を言い出してるの？」  
「さあ？ 迷子らしいんですけど……」  
「迷子？ らしいって言うのは何？」  
「それが聞いたことない住所なんですよ」  
「ふーん……」

やっべ、脚超綺麗。っーか胸でけえな。っいつい目が行くよ。

「……なんでわたくしを見てるの？」  
「え、美人を見ちゃダメだと戒律はこの世に存在しないはずですが？」

俺がそう言った瞬間周りざわっとした。失言だったか。もしか  
迷惑禁止条例に違反してるのか。

「美人？ わたくしが？」

なんでこの人こんなに驚いてるんだろう。

「はい、美の女神もガチンコファイト仕掛けるほどの美人です」  
「そ、そう。あなた、ランキングはいくらなのかしら？」

また出たランキング。いったい何のランキングなんだろう？

「五位です」

学習しない男、それが田嶋晋平だ。

「五位は山本さんじゃなかったかしら？ まあ、わたくしは八位の雪平くんが好きんだけど」

まだ見ぬ雪平くんに嫉妬を覚えた。

「で、本当は何位なの？」

それにしても、この人ええ乳してんなあ。

「こら、何位なのか答えなさい」

「す、すいません。とゆーか何のランキングを聞いてるんですか？」

とりあえず適当に答えるのはやめだ。学習したねシンペー君。

「何のランキングって……男ランキングでしょ？」

「男ランキング？」

やべ、人間なのにおうむ返ししてしまった。

「なんで疑問形なのよ？」

「不勉強なもんで」

「不勉強も何もあなたが生まれた瞬間にランキングには入ってるはずだし、それについての説明や訓練も義務でしょ」

あれ、そんなんあったか？ でも美人さんは当たり前みたいに言ってるからそうなのかもしれないな。

しかし、男ランキング……なんて暑苦しそうなランキングなんだ。

「もしかしたら説明とか聞き逃してたのかもしれないね」

「聞き逃すとかありえないでしょ」

ありえないことがふとした瞬間に起こる。それが人生。

「いや、これは一本取られた。ははっ」

「なんで笑ってるのよ。じゃあ何？ あんたもしかして九万台くらいなわけ？」

「よくわかりません」

場がシーンとしてる。なんかすっげー呆れた顔されてるけど、ちよつとゾクゾクする。

しかしあれだな。堂々としてると格好って突っ込まれないものなんだな。ありがたいような、いい加減いじって欲しいような……

「あの……」

おずおずと誰かが手を挙げて発言しようとしている。よく見れば受付嬢さんだ。

「何かしら？」

「ずっと考えてたんですけど、もしかしてその人……異界人じゃないですか？」

また周囲がざわつとした。

「異界人……」

「あ、でも有り得るかも。社長を美人とか言っただし」

「そういえば異界人は異性の好みが他と若干違っって聞いたことがある」

「でも、社長だからおべっか使っただんじじゃないの？」

「いや、あいつずっと社長の胸とか脚をガン見してるし本心かも」

一体なんの話だ？

「あなた、異界人なの？」

喰い気味に社長さんが問いただしてくる。つーかわけわかんなくてついていけない。

「そうです」

だから肯定しました。異界人の定義がわからんが、こう言えば場を丸く収めそうな感じがする。

「そうなのね……ねえ、わたくしは本当に美人？」

「超絶美人っすー!!」

これだけは自信を持って断言できる。

「ああ、初めて美人って言われたわ。でもこの子なんにも知らないのよね……それに異界人ならランキングは最下位のはずだし。せめて三万台なら即結婚するのに……」

なにやら社長さんがブツブツ呟いている。

「とりあえず、色々説明しなければならぬことがありそうね。それに聞きたいこともあるし」

社長さんが顔をあげて俺を見たという気配を感じる。ずっと社長さんの胸を見てたので顔が動いたのがわかるのだ。

「ついてきなさい」

そう言って社長さんはカツカツとエレベーターへと歩いていく。  
ふむ、尻もなかなかいい。

「あ、あと……」

不意に社長さんが立ち止まる。

「その格好寒くないの？」

やっと突っ込んでくれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2722w/>

---

ようするにバカなんです

2011年10月9日14時20分発行